



参加型が生み出す化学反応を

読者ページにまたまたお便りをいただきました。

しばらく SOLAN のブログをチェックしていなかったら、すごく高頻度に更新されていて驚きました。とくに渡辺先生の記事はボリュームがあり内容も濃く、教育に対する情熱が伝わってきますね！

私もさっそく初の読者投稿をさせていただきます。

SOLAN 小学校では保護者は学校とパートナーである、というのが理念の一つであり、入学式でもそれを改めて強調されていましたね。

その考えには私も大賛成で、お金を支払って教育サービスを受けるお客様ではなく、先生方や生徒の皆さんと共に SOLAN をつくっていく存在でありたいと考えています。

ケネディ大統領の有名な演説である「国があなたのために何ができるのではなく、あなたが国のために何ができるのかを問うてほしい」と同じように、保護者として私はこの小学校に何ができるのだろうと自問自答しているのですが。

この学校にはまだ保護者のコミュニティがなく、保護者同士で相談や連携をする場がないので、自分ひとりでまず何ができるんだろう…と悩んでいます。

PTA など強制的に保護者に負担を強いる団体がないのは、ありがたいと思っています。

また、保護者によって学校に関わりたい度合いや、提供できるリソースは人それぞれでしょう。

ただ、SOLAN 小学校を選んだ保護者の方は意識が高い方が多そうなので、もっと積極的に学校運営に関わりたいと思ってる方もいるんじゃないかと思うのですが（私もその一人です）、そういう方が活躍できる場がまだないので、これからどうやって作っていけばいいのかなあと考えています。

オンラインでもオフラインでも、同じクラスや同学年同士だけでなく縦にも横にも。まず保護者同士が交流できる機会や場があれば、そこから何か生まれるんじゃないかとは思うのですが…。

学校側はパートナーとして保護者にどんなことを期待しているのか、そもそもパートナーであるとは具体的にどういうことなのか、先生方と保護者が対話できる機会もあるといいなと思っています。

正直保護者としては、どこまで学校のことに関わり込んでいいのか、学校や生徒たちのために何ができるのか悩ましいです。

素敵な人材はすでにたくさん集まっていそうなので、学校側からのナッジがあれば、それをきっかけにいい方向に動くんじゃないかなあと個人的には思っています。

長くなってしまいましたが、学校と保護者のパートナーシップに関する渡辺先生のお考えをぜひ通信で書いていただきたいです。

今後も更新楽しみにしています！

ペンネーム「AYA」さんより

AYAさん、まずは素敵なメッセージをありがとうございます。

「お客様ではなく共に作り上げる存在に」。

今回頂いたメッセージの中で、この部分が特に心に響きました。

教育とは、共育とも書きます。

教え育てることを誰かに任せるのではなく、周りの大人たちが手を取り合っ
て共に育んでいくことが、本来の教育の姿とも言えるでしょう。

しかし、現代の日本の学校教育はこの点に大きな課題を抱えています。

例えば、日本の学校の大きな課題の一つに、「過剰提供」があると言われて
います。

簡単に言うと、学校がなんでもかんでもやり過ぎてしまうということです。

例えば、次の図を見て下さい。

文科省『学校・教師が担う業務の明確化・適正化』より抜粋								
		アメリカ	イギリス	中国	フランス	ドイツ	韓国	日本
児童生徒の指導に関わる業務	登下校時の指導・見守り	×	×	×	×	×	×	△
	欠席児童への連絡	×	×	○	×	×	○	○
	朝のホームルーム	×	○	○	×	×	○	○
	教材購入時の発注・事務処理	×	×	△	×	×	×	△
	給食・昼食時間の食育	×	×	×	×	×	○	○
	休み時間の指導	○	×	○	×	○	○	○
	校内清掃指導	×	×	○	×	×	○	○
学校の運営	校内巡視・安全点検	×	×	○	×	○	×	△
	学校広報(ウェブサイト等)	×	×	△	×	○	○	×
	児童・生徒の転入・転出事務	×	×	○	×	×	×	△
外部対応	家庭訪問	×	×	○	×	×	△	○
	地域ボランティアとの連絡調整	×	×	△	×	○	×	△

○＝担当してる △＝部分的、あるいは一部の教員が担当することがある

【3分野33項目】日本の教師が『担当している』『部分的に担当している』＝30項目 圧倒的に多い

この資料は一つの例ですが、日本の教師はとにかくやることが多いです。さらに、学校現場は「ビルド&ビルド」の体質が常態化しており、とにかく業務が増え続けるという実態があります。

この10年間でも物凄い量の業務が現場にプラスされました。

一方で、スクラップは大変苦手です。

削ったり減らしたりすることがとにかくできないのです。

それはなぜか。

原因の一つは「完璧な提供者であらねばならない」という思い込みにあると言われています。

増え続ける業務や要求を何とか完璧にこなそうとして、結果的に多すぎる荷物を抱えきれなくなっている現状が存在します。

そうそう、「要求」と言えば、現場にはこんな要求が降ってくるという象徴的な新聞記事を読んだことがあります。

私はこの記事を読んだ時、最初は吹き出しました。

吹き出したのはもちろん私だけでなく、この新聞を読んでいる多くの読者が同じ状態になったことでしょう。

一方で、反感や怒りを覚えた人もいるかもしれません。

ひとまず、紹介してみます。

「うちの子にテレビを見ないよう指導してください」

中学校の学級担任をしていたとき、私の自宅にかかってきた保護者からの電話です。

私は「それはご家庭で指導すべき内容です。そんなにテレビを見るようであれば、スイッチを切ってはいかががでしょうか」と伝えました。当の保護者は「ほかの家族がテレビを見るのでそれはできない」との返事でした。

最近、自分の子どもを教育できない保護者が増えているのではないだろうか。例えばスマートフォンについて何も教えずに子どもに買い与えるといったことは、インターネ

保護者の責任



熊本大教職大学院准教授

前田 康裕

2019.8.5

ット社会の荒海に子どもを、放り投げるようなものです。

見知らぬ相手とつながって犯罪に遭ったり、友達から言葉の暴力を受けたり、ゲームのやりすぎで依存症になったりする危険性があることを、自分の子どもに十分に教えなくてはならないのです。

しかし、問題が発覚したときには、なぜか「ネット社会」や「学校の指導」の責任になりがちです。危険性を十分教えることもなく、買い与えた保護者の責任は問われなくて

もいいのでしょうか。

教育基本法第10条には「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとす」と記されているのです。

ちなみに、最初に紹介した保護者からは、次の週に再度電話がかかってきました。

「先生、うちの子に歯を磨くように指導してください」

教育には3つの柱があります。

家庭教育。

学校教育。

地域教育。

この3つです。

それぞれに大切な役割があります。

最高の姿は、三位一体となり互いがバランスよく力を発揮できている状態です。しかし、現在の日本はここが極めてアンバランスなのです。

仮に、先の記事にあったテレビや歯磨きのことや、それ以外の生活のしつけや人としての生き方なども「全て学校でやります」と言われたら、「家庭教育を馬鹿にしないでください！」と私は父親として反論します。

でも、こうした笑えるようで笑えない現状が日本にあるのです。

この記事を書いた前田先生のように「それはご家庭でお願いします」と言える場合はまだいいでしょう。

しかし、現実には「はい、分かりました。」と学校や教師が受けてしまうケースが少なくないのです。

こうして、本来は手を取り合って進めていくはずの教育の姿が、日本においては「してもらう側」と「してあげる側」という奇妙な分断が生まれるようになってしまいました。

ですから、今回リクエスト頂いた「パートナーシップをどのように作っていくか」というテーマについては私も今まで考え続けてきたところです。

そして、よりよい関係を創るべく、約20年間取り組みを続けてきました。

色んな講演会やセミナーでも、この話題について取り上げるうちに、ついには出版依頼が来たほどです。

手前味噌で誠に恐縮ですが、その学校・家庭・地域のパートナーシップについて書き上げたのが拙著「BBQ型学級経営」です。今年の3月に発売しました。

ですので、AYAさんからのリクエストに真剣に答えると、このコスモスハーモニーが本1冊分の200ページほどの量になってしまいます。(笑)



キーワードでまとめると、「提供型」に依存する学校を「参加型」の在り方にシフトチェンジしていくことが大切だと私は思っています。

学校だけが完璧な提供者を目指すのではなく、参加の余白をうまく設計し、地域や家庭の強みがかけ合わさっていくことで、教育のポテンシャルを無限大に引き出すことが可能となります。

人はだれしも、得意なことがあって苦手なことがあります。強みがあれば、弱みもあります。

凸凹（でこぼこ）しています。

まるで、パズルのピースのように。

でっばったり、へこんだりしているのが人間の自然な姿です。

そして、自分の得意な事や強みとしていることで誰かに貢献できることは、とても大きな幸福感を生み出します。

また、長所が人に貢献できる自分のストロングポイントだとするなら、短所は人の力を引き出す余白と見ることが出来ます。

相手と繋がったり、力を合わせたりするためには、この余白が大切です。

つまり、ウィークポイントにも大切な意味があるのです。

そうした本来の自然な姿を否定し、何でも自分一人で完璧にこなそうとして、人生を生きるのがしんどくなっている人は世の中にたくさんいます。

日本人はその傾向が特に強い民族と言えるかもしれません。

そして、その象徴的な場所が学校だとも言えます。

凸凹しているパズルを均質なタイルのようにしてしまったり、完璧な提供者を目指して教師が疲弊しきっている現状などは、まさにその典型例といえるでしょう。

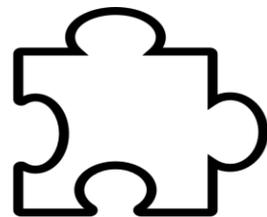
このテーマは、ついつい文章が長くなってしまいますね。

余りにもホットで、今も尚多くの教師の仲間が苦しんでいる内容であったため、ついつい筆が走ってしまいました。（すいません）

SOLAN はこうした日本の教育現場が抱える課題に答えを出し、全国の学校のモデルとなるような在り方を目指している学校です。

旧来通りの学校が完璧な提供者を目指すやり方は、とっくに限界ラインを超えていることに多くの人が気づいています。

だからこそ、学校教育に参加の余白を設計し、家庭や地域の方々の強みが豊かに発揮し、かけ合わさっていく姿を目指したいと思っています。



すでに、懇談等の機会を通して

「～～の時はぜひ連絡をくださいね。」

「～～をする時はきっと力になれると思います。」

「～～のことなら任せて下さい。」

という力強い声が私の所にも続々届いています。

こうした SOLAN につながる皆さんの強みが鮮やかに繋がり重なっていったならば、きっと物凄い化学反応が起きるに違いありません。

AYA さんの投稿文にあった、「ナッジ」（そっと後押しをすること）という言葉、とても素敵な表現ですね。

すでに、管理職とも相談し、その準備をワクワクしながら進めているところですので、もう少し楽しみにお待ちいただければと思います。

（ナッジの準備が着々と整いつつあるということです）

私は「人は、長所で尊敬されて短所で愛される」という言葉が好きです。

この言葉の通り、得意なことでチームに貢献し、苦手なことはともに助け合う、そんなチームの在り方を保護者の方々と共に目指していきたいと思っています。

質問へのお答えになっていれば嬉しいです。（文責：渡辺道治）

以前もお伝えした通り、来週の持ち物やスケジュールは、保護者ポータルから「その他」→「配布資料」の中にある「週間スケジュール」に詳しく記載があります。（毎週金曜日に更新されますので、もし週末に欠席された場合はそちらで翌週の持ち物をご確認下さい）

今週は、学級閉鎖や自粛期間に伴い、ご家庭でたくさんのサポートをいただき、誠にありがとうございました。

担任団一同心より感謝しております。

また、学校でお子さんたちの元気な顔が見られることを楽しみにしております。

尚、来週以降コロナ関連で欠席される際の対応（オンライン接続等）を希望される場合は、1年生学年団のアドレス「2022grade1@seto-solan.ed.jp」までご連絡をお願いします。